

類別詞言語における数量表現と名詞句 の特性について

—日本語とベトナム語を例に—

王 丹

要旨

本論文は、日本語とベトナム語を例に、類別詞をもつ言語における数量表現の分布・形式選択・語用論的機能を統合的に分析し、数量表現が名詞句の特性、情報構造、談話管理、そして認知処理にどのように関わるのかを明らかにすることを目的とする。数量表現は、物を数えるという普遍的かつ基本的な機能を担う一方で、定性・特定性・指示性・情報の新旧・アクセス可能性といった名詞句の談話的特性と密接に関連する。そのため、数量表現の研究は、文法構造と談話機能の相互作用を理解する上で重要な領域として位置付けられてきた。また、類別詞をもつ言語においては、類別詞の有無・種類・語順の差異によって複数の数量表現が並存し、これらの数量表現はそれぞれ独自の特徴を有し、文脈に応じて使い分けられている。この使い分けは、類別詞の有無に伴う構造的差異だけでなく、語用論的条件や談話機能によっても左右され、同一文脈で複数の形式が用いられる場合でも、ある形式がより選好されるといった分布上の偏りが見られる。にもかかわらず、日本語数量表現に関する従来の先行研究は統語的制約、情報構造、意味、焦点、韻律など、複数の観点から分析されてきた。すなわち、数量詞遊離がどの条件で生じるか、数量情報が談話構造のどの位置を占めるかといった理論的・構造的側面が中心的に議論されてきたと言える。しかし、こうした検討にもかかわらず、実際の言語使用において複数の数量表現が競合しうる文脈で、どの形式がどの条件下でどの程度選択されるのかという観点、すなわち「使用条件」と「選好傾向」は十分に扱われてこなかった。また、数量表現と名詞句の定性・特定性の関係は指摘されてきたものの、その関係がどの程度に選択を左右するのかを実証的に示した研究は乏しい。ベトナム語についても、類別詞の出現条件に関する自然談話に基づく実証研究はほとんど存在せず、社会語用論的要因や名詞句の特性を考慮した分析は十分に行われていない。従って、日本語・ベトナム語のいずれにおいても、数量表現の形式選択を「どの形式がどの文脈でどの程度好まれるのか」という観点から体系的に記述し、その選択を決定する要因を統合的に説明する枠組みは未整備である。

本論文は以上の問題意識に基づき、日本語とベトナム語を対象に、数量表現の形式選択を使用実態の観点から捉え直すことを目的とする。従来の先行研究では、統語・意味・語用・情報構造など多様な理論的枠組みから数量表現が分析されてきたものの、複数の数量表現が選択可能な文脈において、どの形式がどの条件でどの程度用いられるのかという「選択傾向」や「使用条件」に焦点を当てた実証的研究は必ずしも十分ではなかった。本論文は、数量表現の選択を単一要因によって説明するのではなく、名詞句の特性・談話機能・認知処理といった複数要因が階層的に作用する体系として

記述することを目指すものである。

第Ⅰ部では、日本語を対象とし、遊離数量詞文と連体数量詞文を中心に、裸名詞も扱いながら、数量表現の形式選択とその影響要因を明らかにする。第Ⅱ部では、ベトナム語を対象とし、類別詞を伴う形式と裸名詞の対立を中心に据えつつ、指示詞を伴う形式や所有表現における類別詞の使用も合わせて検討する。第Ⅲ部では、両言語を対照し、数え上げと数え下げの非対称性、および、数詞＋類別詞・数詞＋名詞といった表現形式を分析対象とし、両言語における共通点と相違点を整理する。

研究方法として、本論文では自然談話とアンケート調査の2つのデータを併用する。自然談話は、数量表現が実際の言語使用においてどのような文脈で出現するのかを確認するために用いる。とりわけベトナム語では、「類別詞＋名詞」と裸名詞の出現傾向を定性文脈ごとに観察することを目的とする。一方、アンケート調査はネイティブ話者による容認度判断に基づき、複数の数量表現が選択可能な場面において、どの形式がどの条件下でどの程度好まれるかを検証するために実施する。特にベトナム語では、類別詞の出現が丁寧さとどのように関係するのかを明らかにすることを視野に入れる。これら2種類のデータを組み合わせることで、数量表現の選択を統語的制約のみならず、名詞句の特性・丁寧さ・文脈条件など複数要因の相互作用として捉える分析が可能となる。

第Ⅰ部(第2・3章)は日本語を対象とする。第2章では数量詞遊離現象を取り上げ、先行研究が統語的制約・格関係・情報構造といった複数の観点から説明を試みてきたことを踏まえつつ、これらの説明には射程に限界があり、数量詞遊離の分布を一貫して捉えるには十分ではないことを指摘した。本章ではこうした問題点を踏まえ、意味役割に基づく説明枠組みが数量詞遊離の分布を最も適切に捉えうることを示すことを目的とした。分析の結果、名詞の受影性(affectedness)が遊離の自然さに影響することを明らかにした。すなわち、プロトタイプの *under-goer/patient* を表す名詞句は[+Affectedness]であるため、数量詞遊離を受け入れやすく、非プロトタイプ的な名詞句では[-Affectedness]であるため、遊離が生じにくいことが示された。さらに、外項からの数量詞遊離については、数量的意味の前景化といった談話的要因が関与して成立することが確認された。これらの知見は、数量詞遊離を適格・不適格の二分法で捉えるのではなく、言語形式の選択が階層的・段階的な分布を示す現象として把握すべきであることを示唆する。

第3章では、連体数量詞文と遊離数量詞文の形式選択に焦点を当て、話し手・聞き手の既知性・未知性が選択傾向にどのように影響するかを検討した。本章では、日本語母語話者15名を対象としたアンケート調査を実施した。分析の結果、数量情報が話し手・聞き手双方に既知の場合は連体型が最も自然と評価され、未知の場合は遊離

型が最も自然と評価される。話し手既知・聞き手未知の場合は両形式とも使用されうるが、連体型は情報量が多いため避けられやすい。また、連体型の容認度評価は、話し手・聞き手に既知の場合、最も自然であり、聞き手に未知の場合やや自然、話し手に未知の場合不自然というように、連続的・階層的な特徴を示した。これらの知見は、実際の言語使用における数量表現の選択が適格/不適格という二分法によって決定されるのではなく、「どの形式がどの条件でどの程度選好されるか」という連続的な体系として把握すべきであることを示している。本章は数量表現の選択原理を文法的制約中心の分析から、既知性・情報量に基づく動的な選択体系として捉える必要性を示すものであり、日本語数量表現研究に新たな視座を与えるものである。

第Ⅱ部（第4・5章）はベトナム語を対象とする。第4章では自然談話に基づき、「類別詞＋名詞」と裸名詞の分布と使用条件を分析した。ベトナム語においてこの二つの形式は定性との関連から多く議論されてきたが、日常会話において類別詞が使用されない傾向があることから、先行研究のデータのみでは使用実態を十分に捉えられていない可能性が指摘できる。本章の自然談話分析の結果、裸名詞は定不定を問わず広く使用される一方、「類別詞＋名詞」は指示的文脈に限定される傾向があることを示した。さらに、本章では、類別詞の使用が丁寧さとどのように関わるかを検証するため、ネイティブ話者によるアンケート調査も実施した。その結果、丁寧さが要求されない場面では類別詞が使用されにくいことが明らかとなった。これらの結果を説明するため、文体、丁寧さ、情報量といった三つの要素を中心に議論を行なった。これらの知見は、従来「類別詞＋名詞」が定名詞句を標示する形式であるかのように扱われてきた点を再検討するものである。本章の結果は、類別詞が定性そのものを直接標示しているわけではないことを示唆する。むしろ、類別詞の使用は、他の談話・社会語用的要因によって要請されるため、その結果として定の文脈に分布しやすくなっていると考えられる。たとえば、有生性は類別詞を要求しやすく、また有生性名詞は定文脈で使用される割合が高いため、類別詞が定文脈に多く出現しているように見えるという現象が説明される。以上を踏まえ、本章は、ベトナム語の類別詞の使用は定性と直接に対応するのではなく、情報の新旧・アクセスのしやすさ・丁寧さといった要因によって決定されることを主張する。すなわち、新情報の導入や聞き手への配慮が必要な場面では類別詞が現れやすく、既知情報の言及や負担の小さい場面では簡潔な形式である裸名詞が用いられる。これにより、ベトナム語の類別詞を定性を標示する形態ではなく、談話・文体・対人配慮と関わる多元なメカニズムであることが示された。

第5章では所有表現を取り上げ、所有標識 *của* の出現は所有対象に依存するという先行研究の問題点を指摘した上で、ベトナム語母語話者 12 名を対象としたアンケー

ト調査を行った。分析の結果、所有者に類別詞が付く場合に *của* の介在が必要であるという事実が確認された。この現象を説明するため、語彙的緊密性のテストと有生性階層に基づく予備調査を実施した。語彙的緊密性の観点からは、所有者に類別詞を伴う複合構造はより句的であり、所有者に類別詞を伴わない複合構造はより複合語的であることが明らかになった。つまり、類別詞の付加によって所有者の指示性・卓立性が高まるため、所有対象との複合が困難になり、結果として *của* による明示的な所有関係の標示が必要になる。また、有生性階層に基づく予備調査では、譲渡可能な所有関係において所有者名詞句の有生性が高い場合に *của* の使用が求められることが示された。さらに、有生性の高い名詞は、類別詞の使用も求めるため、結果として所有標識と所有者につく類別詞が共起しやすくなる。一方、譲渡不可能な所有関係においては、所有者名詞句の有生性が低い場合に所有標識と類別詞の共起が要求される傾向も観察された。以上の知見は、名詞の特性が卓立性に寄与し、その卓立性が類別詞の使用のみならず所有標識の出現を引き起こす要因となることを示唆する。本章では主に有生性に焦点を当てたが、定性・特定性など他の名詞の特性も同様の影響を持つ可能性が高く、今後の検討課題として残される。総じて第5章は、類別詞が付与された名詞は指示性・際立ちが強く複合語的統合が困難であるため、所有関係を明示的に示す形式が選択されることを明らかにした。この結果は、名詞の特性が類別詞使用の動機のみならず所有標識 *của* の出現にも影響を与えることを示し、ベトナム語の所有構文研究に新たな視座を提供するものである。

第III部（第6・7章）は日本語とベトナム語の対照研究を行う。第6章では、数え上げと数え下げに見られる非対称性に注目し、両言語に共通して数え上げのほうが自然と評価されやすい傾向があることを示すとともに、この背景に構文のチャンク性・自律性といった認知処理上の要因があることを指摘した。第7章では、数の大小、具体・抽象名詞、カジュアル場面における口語的変異といった複数の観点から両言語の数量表現を比較し、両言語に共通して類別詞の余剰性に起因する省略傾向が観察される一方、日本語では「つ」による弱化、ベトナム語では類別詞の完全省略という異なる省略方略が採られることを示した。これらの知見は、数量表現の使用を規定する普遍的・個別的要因の共存を可視化するものである。

類別詞言語における数量表現の使用は、単一の要素制約によって決定されるのではなく、複数の要因が階層的かつ段階的に作用することで、どの形式がどの条件下でどの程度選択されるのかが決定されるという点が結論として挙げられる。具体的には、日本語においては名詞の受影性が数量詞遊離の自然さに影響し、さらに話し手・聞き手の既知性に応じて遊離型と連体型の選択傾向が連続的に変化することが示された。一方ベトナム語においては、類別詞の使用は定性を直接標示するのではなく、情報の

新旧、アクセスのしやすさ、丁寧さなどの談話的・社会語用的要因によって動機づけられ、名詞の卓立性が所有標識の出現にも影響することが明らかになった。さらに日本語とベトナム語の対照の観点からは、両言語に共通して類別詞の余剰性に基づく省略傾向が観察される一方、その省略の方略は日本語では「つ」の弱化による単一化、ベトナム語では類別詞自体の完全省略という異なる方向性を示すことが確認された。

本研究の成果は、数量表現の選択を適格・不適格の二分法ではなく、複数の意味・語用・社会言語学的・認知的要因が階層的に作用する連続的選択体系として捉える必要性を示した点にある。また、日本語とベトナム語の対照により、普遍的傾向と個別言語方略の双方を説明できる体系を提示し、類別詞言語の数量表現研究に新たな視点を提供する。今後の課題として、日本語の数量表現については、自然談話に基づき、形式選択の精緻な記述と要因解釈が必要である。また、ベトナム語については、本論文で扱った数詞を伴わない表現に加え、数詞を伴う数量表現の実際の使用条件を自然談話に基づき調査することが課題として挙げられる。両言語の対照研究において、日本語連体数量詞文とベトナム語類別詞構文が同一の談話機能を担うのかどうかさらに検証することが必要である。最後に、今後は他の類別詞言語にも分析対象を拡張し、数量表現の普遍性・個別性をより広い類型論的枠組みのもとで検討することが期待される。